



あなたが見ている 世界

遍織

時計塔

機械時掛けの街を孤児の少年が彷徨う。そこでは何もかもが規律正しく、また誰もが自分の仕事を持ちそれを粛々とこなす。スリや盗みの必要とされる隙間すらない街に長居する理由はない。立ち去ろうとした少年を呼び止める声があった。

彼は時計塔の技師である老人だった。老人は街の誰よりも早く起きて時計塔に上り、大時計が規則正しく時を刻むのを確かめた。点検し油を注し、摩耗した部品を取り替え、すべての仕事の手順を少年に教えた。時計の機構を理解するのと同じように、老人が動かなくなる時が近いことを少年は理解した。

老人がいなくなると、大時計の点検は少年の仕事になった。あれほど老人が心身を傾けていた仕事は、しかし酷く退屈だった。精巧な時計は滅多なことでは壊れることはない。申し訳程度に時計の様子を見るだけだった少年は、ある日街の様子が変わっていることに気づいた。

あれほど規則正しかった街の人々に乱れが生じていたのだ。遅刻や残業が増え、仕事の乱れから至る所で揉め事が起きた。整然としていた街角に浮浪者や盗人がみられるようになった。そしてついに、街は完全に動きを止めた。まるで、時が止まったかのように。

あの大時計が時を止めたのだと知ると、少年は老人の教えを思い出しながら無我夢中で修理した。その頬に涙が伝うのも気づかぬままに。そして、最後の歯車がカチリと音を立てるのを聞いたとき、自分もまた街の歯車の一つとして受け入れられたのだということを、少年は初めて悟った。

。

やわらかいもの

僕はぐにゃぐにゃした。そのか弱く柔らかいものに触れて。僕は堪らずに溶け出した。そのあまりにも滑らかに甘めく幻想の中で。身体のコを失って、前後も左右もなく、身体の上真上に崩れ落ち。そして所在をなくした愉快だけが宙空を漂うのを、透明な目玉が見つめる。

宝探し

「では、目隠しを取ります。見えましたが？」アナウンスともに食い入るように映像に見入る参加者。「制限時間内にその場所を探してください。目印になるものが見えた方はラッキー」空しか見えない！ 内心の嘆きは表に出さず、スタートと同時にいっせいに首無し人間たちが走り出す。

怪物

ベッドの下には恐ろしい怪物が住んでいて、隙あらば喰いかかろうと鋭い牙と三つの目を光らせている。だからわたしは、夜毎震えて朝日とともにベッドを飛び出す。現実には散々小突き回された後でも、わたしが安心してベッドから脱出できるよう、姿のない怪物は今日も暗がりて牙を砥ぐ。

持ち去った

彼らは私から沢山のものを奪った。腕をもぎ取り髪を焼き足を嚙り胴体を踏み潰して、とうとう頭まで持ち去って、残されたガラスの目玉すらいつしか転がり去った。だか、変わらず私はそこにた。瞬きすらない暗闇で考える。では私は場だろうか。何故私の心を持っていってくれないのか。

墓場

棺桶は丈夫でなくてはならない。火葬などもってのほかだ。蓋を爪で擦る音でも多少の賑やかしにはなる。ついでに小さな穴を穿ち墓土の上に配置すれば、陽の光を浴びた吸血鬼の絶叫が華を添えよう。ポルターガイストの破裂音でリズムをとり、墓石の上で踊ればストリングスは要らないさ。

ボタン

ボタンを掛け違えたばかりに、窒息して死んだひとがいるというので、上から慎重に閉じていたのに、何時の間にか裏返って、布の中に包まって、外界への際間を閉じていることに気づいた。

腐っている

（（あなたは腐っている））水底から湧き上がる泡沫のようにくぐもった囁き。私は腐ってなどいない。否定が眠る感覚を呼び覚ます。（（腐っている……））湿気に膨れた身体は脆く、陽光を掴む腕は朽ち、撒き散らされた自分の残骸で大地は肥えた。それは私を食い破る新しい萌芽の音。

感覚

羊水の中に水没させられたようにふっと現実感を失って、気付けば身体から抜け出した感覚が、車道に飛び出して行ってトラックに轢かれるのを黙って見ていた。痛みも哀しみもそれが連れて逝ってしまったので、あとはずっと夢の中。微笑みながら、ふわふわした気分でスキップしている。

階段

エクストリーム階段オチ！それは階段落ちの華麗さと最終段到達の速さを競うエクストリーム競技！それでは早速選手を紹介しましょう。エントリーNO.1「俺に落ちれない階段はない」経歴20年のスタントマン、雀喜智円が参戦！大本命ですね。続きましてはエントリーNO2！落ちた階段数知れず、ドジっ子歴は年の数、木菜もち子、スカート姿で登場だァ！これは審査員の心象がいいかもしれません。最後の選手...な、なんと大物稲川淳二が参戦だー！「一分以内にオチます」こ、これは、競技を勘違いしていないでしょうか。心配です。注目の競技はCMの後！

トイレの看板

トイレの前に人だかりができています。「何かあったんですか?」「トイレの看板が逃げたんだって」だから、男用か女用か分からず困っているのか。「近くにあるトイレがどっちかを確認すれば……」近くのトイレでは男性と女性のシンボルが仲良く抱き合っていた。「どっちが逃げた方?」

ゆるキャラ

「ほら、あれだよあれ、パンダ的なやつ」「はぁ、客寄せパンダですか」「そうそうそれ、マスコット的な!」「ゆるキャラですか」「それだよ、ゆるいやつ。いわゆるスライム的な!」「ゼリー状の」「飲むやつな、窒息するといけないからな!」「ご当地名物白黒餡ドリンクちゃんです」

君

いつもはお喋りで陽気な君が、今日のはのっぺりとした顔を黒い表情で覆い、何も語りかけてくれない。だんまりに耐えかねて僕の気分も急降下。冷蔵庫の駆動音ばかりがうるさく響いて、寂しさを助長する。手を伸ばしても君の身体にはスイッチがない。TVのリモコンが昨日から雲隠れ中。

ねえねえ

昔、俺の書いたツイノベに対していちいち「ねえねえ、それ何、どういう意味？ ねえねえ」とリプライを送ってくるフォロワーがいて、全て丁寧に解説をしてやっていたが、ウザくなってブロックしたので、誰も俺の小説を理解してくれなくなってしまった。その女は今、俺の隣にいます。

スイカ割り

スイカ割りとは、砂浜に埋まって目隠しした人が棍棒を持ってウロウロするのを見守るスポーツで、当たると赤くパッキリいくことからそう呼ばれている。叩く場所は指示しているが、当然喋りすぎると位置がわるるので、いかに自分の位置を悟られずに他人の場所に誘導するかが鍵となる。

スカート

あっ、コートの下にスカート履いてきたかどうか憶えてない。会社に行けば制服に着替えられるから万一履いてなくても大丈夫だけど、履いてないかもって思うだけで落ち着かないよっ！ 今すぐ前開けて確認してスッキリしたいけど、本当にパンツだけだったら完全に変態だしどうしよ～。

マウス

机の上をマウスが行ったり来たりしてせっせと会議の資料を作っていたが、ふいにパタリと臥せて動かなくなった。寿命かと思い腹を撫でると、息を吹き返して最期にキィと鳴いた。操作を受け付けなくなったポインターは相変わらずせかせかと走り回っており、俺は悲しまなくて済んだ。

永遠

人が滅び、写真は色褪せ、書物は腐り、機械は錆びつき、目にするもののないあらゆる記録が風化し、見知らぬ生き物が闊歩する地上に、姿を保てなくなった建物が砂となって降り注ぐとき、かつての光景を留めるものは、遙か彼方に光速で遠ざかり続けていた。時の流れる限り何処までも。

神の創造物

最近、神の存在を信じられずにいる子供が増えています。彼らは宇宙の神秘を知らないのです。惑星の土を踏むこともなく、果てしない闇と、清潔で無機質な船の中しか知らない第二世代たち。神秘を示すしか……この船に積まれた唯一の神の創造物、冷凍人間を……一人でもいいのです……。

切腹

「切腹による自殺者が首吊りを超えました。これが江戸時代からの自殺者の推移表です」「見事なV字回復ですね」「安価なレーザーブレードの普及により、介錯を必要としなくなったことが増加の原因と考えられます」「日本固有の文化なのに、見た目がスターウォーズなのが皮肉ですね」

本日の時の人

「本日の時の人！1000の殺人容疑と300件の訴訟を抱える自称カリスマカジュアルマーダーのJさんをお呼びしました。早速聞いてみましょう。あなたを殺人に駆り立てるのは一体何なんですか？」「今蘇生技術が進んで、誰ですぐ生き返るじゃないですか」

「そういう風にリスクが最小化された世界って、退屈じゃないですか。ぼくはね、殺るか殺られるかという昔のスリリングな空気を復活させたいんです。それでこそ人間のパフォーマンスが最大限に発揮されるんじゃないかな」「なるほど。クソくらえ」

オブジェクト埋め込み情報

古典的哲学命題のひとつ、オブジェクト埋め込み情報は一体誰が何のために造り、そしてそれは正しいのか。林檎が赤いのと同じくらい自明に、脳内に刷り込まれる認識情報。君の顔を目にする度に明滅するかわいい……いや、これは自分の脳内が作り出した……でも、それをどう見分ける？

怪物 2

三日三晩都市を蹂躪した怪物は、軍と勇敢な市民の協力によって倒され、亡骸は深海の底に沈んだとていのいい発表をされたが、その残した大量の糞の山が共同慰霊碑に埋葬されたことはあまり知られていない。それには綺麗な花が咲いていたという。

哲学的ゾンビ

「何故殺したんだ」「見たんだ！ あいつ部屋の中に一人にいる時、部屋の隅に座ってぼーっとして何もしてないんだ。あいつは人間じゃない、哲学的ゾンビなんだよ！」「じゃあ君は一人の時何してるの」「本読んだり映画観たりだよ」「へえ」刑事は部屋を出ると何処かに電話し始めた。

スイッチ

「遂に核ミサイル発動装置を手に入れたぞ！」「旧時代の装置だな。タッチパネルは何処だ？」
「音声入力は？」「発射！……ダメだ」「キーボードもないし、どうやって発射するんだ！」
「ジェスチャーにも反応しない」「この真ん中の赤いのは？ 何故かこう言いたくなる。ポチッ
とな」

時間遡行

ヤツを傷つけるほど時間が逆巻く。幼馴染の過去は不可逆的な未来へと繋がる。中学校、小学校……楽しい思い出すら凄惨なイジメに塗り変わる。気づくと赤子になって二人で寝かされていた。親は話に夢中だ。そして気づく。ヤツの誕生日が半年早いことを。柔らかな重みと確たる殺意を。

ロスタイム

世界は終了しました。これからロスタイムの始まりです。空費時間は人類が生まれてから今までの600万年です。世界終了まで気を抜かずに頑張ってください。

犯人は.....

「犯人がわかりました.....だが階段から落ちた衝撃で記憶が！」「では同じ衝撃を与えれば思い出すのでは？」「痛ッ」「そんな野蛮です！何か別の方法が」「反対するなんて怪しい！」「痛いッ！血がっ」「本気で殴るなんて殺して有耶無耶にするつもりだ！」「みんな落ち着いて痛っ」

「犯人はこの中にいる！」探偵は拡声器に向かって叫んだ。「犯人は.....男！」「5万人います」「の中で、11月2日生まれの人！」「150人います」「の中で、名前の頭文字が『あ』の人！」「あと10人！」「えーっと、えーっと」「もう少し、頑張れ！」

「犯人は、この中にいる！」「誰だ誰だ」「わたし最近、ぬか漬けにハマってるんですけど、今日の朝、茄子を漬けてきた人」チャーララララッ、チャーララララッ、チャラチャラ！「ひとり！」おおー！「タモリストラップくれ」「ねーよ」

「犯人は、この中にいる！」「誰だ誰だ」「えーっと、じゃあ、昨日の夜、人を殺した人」チャーララララッ、チャーララララッ、チャラチャラ！「ゼロ！」ああ～。「ざーんねーん」「続いてお友達紹介です」ええ～。「お友達は、警視庁捜査一課の.....」

ハロウィン

闇夜に浮かぶ橙色のいびつな笑顔。一つだけ泣き顔だから、キミが作ったものと知れた。ジャック・ザ・リッパーはナイフを取り出し、ジャックオランタンに切れ込みを入れる。新しく加わったいびつな笑顔に、キミはどう顔を歪めるだろう。トリックは仕掛けた、さあお菓子を用意しよう。

ハロウィン 2

「Trick or Treat!」「あらあなた達仮装してないのね」「してるよ!」「しないとお菓子あげない」「じゃあ悪戯だ!」仮装を脱ぎ捨て悲鳴を背中に走りだす。「ハロウィンなのに誰も仮装してないなんて!」街を練り歩く小さな怪物達に紛れて、二人の姿はもう見えない。

パンドラの箱 1

女が箱を開けると、そこから様々な災いが飛び出したので、慌てて閉めた。箱の中には、何かが残ったかもしれないし、ないかもしれない。人にとって良いものかもしれないし、悪いものかもしれない。女は決して開けてはいけないと言い含めて娘に渡した。娘は好奇心に負けて箱を開けた。

パンドラの箱2

パンドラが箱を開けると、そこから買って置いたプリンをお父さんに食べられる災いと、遠足の日風邪をひいて休む災いと、録画予約した番組が野球中継の延長で録れない災いと、その他様々な災いが飛び出し、最後に足カクンされそうなき配を感じて回避できる希望だけが残った。

パンドラの箱3

パンドラは後生大事にしまっておいたお菓子箱の蓋を開けた。甘ったるい悪臭と共にコバエの大群が飛び出し、ネズミが体当たりして出ていく。次いでゴキブリが素早い動きで逃げ出し、最後にうねうねと身体をよじる幼虫が這い出して行った。そして、箱の底には小さな穴だけが残った。

。

パンドラの箱4

パンドラが箱を開けると、そこから様々な起こるかもしれないが起らないかもしれない災いが飛び出し、最後に箱の底に死だけが残った。

ヘンゼルとグレーテル

ヘンゼルとグレーテルは母親に森の奥へと連れられながら、密かに透明の液体を撒いていった。すぐに迎えにくるからと言い置いて母親が帰る。やがて夜になり、兄妹がマッチをすると、一筋の炎が帰り道を照らした。帰り着くと家は燃え、母親は焼け死んでいた。

シンデレラ

不幸な娘は、意地悪な継母に着飾らされ、お城の舞踏会に押し込まれる。踊りの相手は残酷な王子で、夜の相手は朝日を二度と拝むことはできない。命からがら逃げ出した娘の落とした靴を手掛かりにやって来た王子を恐れて、若い娘達は皆足を切り落としたので、娘は自らの足で城に戻る。

竜 1

竜の渡りが始まると岩は防備を固める。冬の訪れを告げる咆哮が冴えた空気を震わせ、力強い羽ばたきが虚空を打つ。旅人は岩陰に隠れ、子供が数名消える。この季節になると決まって現れるうろんな商人が、鱗や角を売り出す。人々は頭を垂れ、ただ地面に落ちる影が過ぎるのを見つめる。

竜2

村の名の由来には諸説あるが、竜の遺骸は三年分の収穫祭を一遍にしたような馬鹿騒ぎをもたらし、その年は飢餓も口減らしもなく今の世代も続く人口比の偏りがその証拠といい、その癖領主の館にあるのは牛の角と言って譲らない人々の村には、ただ今ギザギザとした峰が残るのみである。

竜3

竜殺しは可能かどうかという議論において、伝説の英雄を盛んに持ち出すくせに、十年前現実におこった狩りについて誰も触れないのは何故であろうか。風の通り道に網を仕掛けて無邪気にはしゃいでいた子ども顔と、地面に引き摺り下ろされたあの美しい生き物を、おれは忘れていない。

竜4

不浄の地とされる村外れの竜骨に住み着いた浮浪者は、瞬く間に子供達の英雄になり魔術師になり憧れの的となり石礫の的となって大人達の鼻つまみ者になったが、今では歯っ欠け笑顔で日の出前から畑を耕していた。彼の娶った若い村娘が竜骨を居心地のいい家に変えた時、魔法は解けた。

川面から飛び立った龍の七色に燦めく鱗から振り落とされた滴が、長らく戦が続き、血を吸い重く湿った大地で種撒きを忘れて呆然と立ち竦んむ人々の頬を大粒の雨となってバラバラと打ち付けた。水の膜を脱ぎ捨てた昇龍は乾き、抜けるような青の中にスッと消えた。その水は温んでいた。

竜6

山歩きしていた娘が竜の卵を見つけたと言って、丸い石を四六時中身体に抱えていたので、親達は笑ったが、娘は石から生命の鼓動を感じるのだと言って離さなかった。やがて本当に石が熱を帯び始め、心音が疑いのないものになったとき、地響きと共に隣の山が動き出し、竜が姿を表した。

竜の逆鱗に触れたと慄く大人を押し分け、娘は竜の前に立ちはだかった。「あなたの卵を盗んだのは私です。返しますから、どうか怒りを収めて」娘が差し出した卵を竜はひと飲みにした。驚く娘に竜が優しく語りかける。「これは凍えていた私の心臓。お前のお陰で三百年ぶりに蘇ったよ」

愛の見返し

君が好きだと言ったら「結婚してほしいの？」と問われ頷くと「私は指輪がほしい」と言われた。給料三ヵ月分のダイヤの指輪を持って僕の愛情の見返しは何かと訊いた。「あなたが私を愛することと、私があなたの愛を受け取ることは別なの。受け取り証明がいるの。それまではお預けね」

愛してるのメッセージ

愛しているとメールに書いて送ると宛先不明で返ってきたので、仕方なく手紙にしたためたら年賀状になって戻ってきた。黒板に書けば落書きに埋没して見えず、屋上から叫んでも誰も振り向いてくれない。泣く泣く瓶に詰めて海に流すと、数年後見知らぬ娘がやってきたので僕らは結婚した。

愛の文字

書き損じたラブレターで一杯のゴミ箱に新しい屑を積み上げているうちに、愛がゲシュタルト崩壊して何が正しいかわからなくなる。愛の字が上手く書けない。この愛は変なのかもしれない。最初に書いた物を不格好でも渡せば良かったと思いながら、最新作を紙飛行機にして窓から飛ばす。

愛の練習

あなたの漢字練習帳が私の下駄箱に入ってたけど。自主練？でも「愛」の字の途中「殺」が混じってたけど」「...なんで僕だってわかったの」「前に板書してた時、字に特徴あるなーって思って覚えてたの」颯爽と去る委員長の背を見ながら、今度はちゃんとラブレターを書こうと思った。

。

血液型

「父さんはA、母さんはO、二人の血液型ではABのおれは生まれない！」「ばれてしまったのね」
ビリビリバリッ「私の本当の血液型はF、父さんはPよ。遠い星から地球の調査に来たの」「お前も成人したし、お別れださとし。ちなみに本当の息子はこのひろし」ニャー「ひろしいい！」

血液型 2

液型占いの結果は嘘だ！ 特定の結果で人々の性質を操作しようとしているアメリカの陰謀だ！

本当の血液型占いの結果は、A型はクズ、B型はクズ、AB型もクズ、そしてO型は天才、リーダーの資質ありだ。つまりO型である俺に全員ひれ伏す運命...うわ何をするあqwせdrふじこ

血液型 3

血液が不足しています！ 献血にご協力ください！ 足りないのは以下の血液です。15～20歳までのA型美少女の生き血。10～15歳までのO型美少年の生き血。ご協力いただいた方には、もれなく以下の特典がつきます。カロリーメイト、オレンジジュース、閣下のハグ。

血液型4

今日の占い血液型選手権！A型代表は大学生のA君、B型代表は女子高生のBさん、O型代表は主婦のCさん、AB型代表はいなかったのでA型とB型の二人三脚です。よーいスタート！今日の障害物は巨大岩！薙ぎ倒されるA、B、AB。一位はCさん。C型の皆さんはラッキーです！

「犯人はあなただ！」「違いますよ、アリバイがありますから」「ぐぬぬ」「しっかりしてください探偵さん。どうするんですか」「……あなた方をここに呼んだのは他にもない……この中に犯人がいる！ というわけで、二巡目を開始する！」「えっ」「自白するまで続く！ 犯人は……」

並び順で私の背後。だから彼とは一巡しないと体育祭のフォークダンスと一緒に踊れない。いつもあとちょっとで曲が終わる。私はは本番のCDのBPMを上げてその分曲を長くした。普段よりも疲れたけど、彼の手を握った瞬間どうでも良くなる。惜しむらくは踊れる時間も短くなること。

花の金曜日とか憂鬱な月曜日とかいろいろあるが、曜日というと、おれは色を思い浮かべる。例えば、月曜なら赤、火曜なら白、水曜なら薄い青の水玉で、木曜は紺色のしましま、金曜はレース、土、日はない。今週も一巡した、と思いながらおれは階段の下を離れた。

溶けだす夜

溶けだす夜のイルミネーション。瞬きは囁き。垂れさがる滴の輝きに封じ込められた思い出は、近くて遠い闇の中に消えた。滲んだ視界できみは見憶えのない顔を探す。誰もいない街角に冷たい風が吹いて朝焼けが近いことを知らせる。誰かの目覚めに引き寄せられて、今日も夢の中を彷徨う。

休みの日には

車も免許も大きいトランクもないから、休みの日には君を着飾らせて庭のブランコに座り、夢の話語り続けた。毎週末、凍える寒空の下でもかかさずに。君と離れ離れになる朝、隣人たちは涙を流して訴えた。これは間違いだ。二人は愛し合っている。現実を受け入れられなくなるくらい。

抱擁

黒々とした汚泥に白い素足を滑り込ませ、柔らかく沈みゆく地面に足をつける。指の隙間を滑らかな泥が通り抜け、見えない質量が脚の間をすり抜ける。這い上がる冷気が肌を逆立て、胸の間を泡が撫で上げると、やがて密着する泥が温もりを持ち始める。それは、世にも優しく硬い抱擁。

ただのモノ

ただのモノになって浮かびたい。心を解放して、夜の中に広がりたい。黒い鏡面の下、あまねく映り込んだ世界の裏側で息を潜め、さすらうものたちの声を聞き、やがて静かに落ち込んでいく。潮流が運ぶままに、誰かの差し伸べた指をかすめて。

真夜中

真夜中。咽び泣くギターの音色が、夜のしじまを揺らす。目を開けてこれは誰かの押し殺された泣き声だと気づく。壁に耳をつけて卑猥な喘ぎを探り当てる。高まる女の悲鳴がふいを打ち、堪らず飛び出した通路をおねだり口調の猫が通り過ぎる。遠ざかる歌声。そしてまた静寂が耳を塞ぐ。

憐れみ

対峙した男は恐怖のニオイをまき散らしながら後退した。必殺の距離からの跳躍。彼の牙を避ける術はない。そのとき男の手の中で何かが火を噴いた。轟音と暗転。地面に横たわる彼の頭を男が撫でていた。心底から憐みの表情を浮かべて。彼は最後の力を振り絞り、男の手を食いちぎった。

残り香

彼女はシーツの匂いを嗅いだ。甘やかな幻想の残り香を求めて。そこで父と母が愛し合っていたのを知っているから。もしかすると、ここでもう一人の自分が生まれ落ちるかもしれない。彼女は暗いトンネルの記憶を持っていた。生まれてこのかた、ついぞ見たことのないあの暗いトンネル。

波

轟きとわずかな気圧の変化を伴い、遙か彼方から地球を半周して、長い旅の果てに、素足の指先へと打ち寄せる。周囲の砂をさらい、佇むものの魂を抜き去って、引いていく。ひたすら遠くへ。また打ち寄せるべつのもものたちのざわめきに、かすかな残響だけを滲ませ、もう二度と戻らない。

意識の表層

意識の表層に浮かべるのは、丸くて赤い果実がいい。溢れ出すほどに艶やかで、輝くように美味しそうであればいい。取り上げれば軽く、齧ると空虚な味がするといい。

意識の深層

意識の深層に沈めるのは、黒くて四角い箱がいい。純真なきらめきを箱いっぱい詰め込んで、二度と浮かんで来ないように、重い鎖で巻き込んで、大きな南京錠をするといい。そして、鍵だけをずっと密かやかに手のひらに握っているといい。

物語

思い残すことは、と訊くと老人は首を降った。隣の孫も似た表情で首を振る。これから世界が滅ぶのになぜだ。過去の物語があるからと老人。未来の物語があるからと孫。なぜ。物語りを聞くかね、と老人。隕石が落ちて前髪を焼き、津波がすべてを飲み込んだ後も老人は物語を語り続けた。

わたしの

腐り落ちた鎖の先から覗いているのは、わたしの心だ。冷たい床を湿らせるのは、わたしの体温。汚物の中で干からびているのはわたしの過去で、残飯の中に沈んでいるのは、わたしの未来だ。そして、格子の向こうからわたしを見ている。わたしの良心。

噂

そのひとのツイートは含蓄が深く優しさに溢れて大変励まされる内容だったため、誰かがbotだという噂を流したので、本人が顔を公開したが、あまりに美しかったためCGだという噂が流れたので、握手会を開催したがロボットだという噂が流れたため、仕方なく自殺して伝説になった。

ガラス

コーヒーがくるまで、仕切りガラスに映る店員さんを見つめる。後ろを向いているからって、すぐ背後まで近寄ってくるので、わたしはどきどきして振り返れなかった。不意に、彼がわたしをまっすぐ見て微笑むので、気づいた。ガラスに映っているんじゃなく、その向こうにいるんだって。

かわいそうなひと

「たった一人でもいいから死にたいです」「そんなこと言わないで。いつかあなたにも一緒に死んでくれる人が現れますよ」「心中しなきゃいけないなんて、誰が決めたんですか」「だって、一人じゃ寂しいじゃないですか」「一人がいいっていう人もいます」「.....かわいそうなひと」

新居

新しく越してきた部屋の床の凹みや染みなどから、前の住人の生活を想像するのが癖になっている。ふと、一部分だけ妙に床が綺麗な場所があることに気づいた。家具のあった場所は日焼けせず綺麗なままであることが多いが、形が直線的ではない。まるで、人が寝そべったような形なのだ。気味が悪いと思いつつ、それきり忘れていた。だがしばらくして、その床が何処か黒ずんでいることに気づいた。拭いても拭いてもまるで元々あった染みのように綺麗にならない。次の日には臭いまでするようになっていた。蠅が飛び蛆が湧くに至って、僕はそこに何があったのか悟った。

アイコン論争

アイコンを顔写真にすべきか否か論争について決着が。公式で顔写真以外禁止になったのだ。「まだ猫のまま！ 通報してやる」「これ地顔だし。ていうかキミ、エイリアンだったの」「いつの間に地球は猫だらけになったの？」「五万年前に進化した。ちなみに人類はとっくに絶滅したよ」

銀河

夜空の天の川は銀河の光だ。言葉の元をたどれば、その名の通り光の帯なんだよ。それは、銀河の腕に抱かれているから。ご覧、あの光の渦を……つまり、ぼくたちはぼっちだ。

銀河 2

夜空が怖い。果てしない虚無に飲まれて、一人ぼっちになる気がして。そう言うと、母さんが田舎の空を見せてくれた。数えきれない星が瞬く空。銀河はね、離れてみると渦巻なの。地上から川のように見えるのは、地球が銀河の中でその腕に抱かれているから。だから寂しくなんかないよ。

死んだふり

死んだふりのうまい女の子がいた。余りにうますぎてクラスの誰も彼女に話し掛けなかった。時には机に花を飾りすらした。だから僕も彼女が死んだものとして学校にいる間中話し掛け続けた。答えはなかったけれど。卒業の日、彼女は「ありがとう」と言った。初めて目があった気がした。

縄張り

足を踏み入れた瞬間、寒気に似た威圧感に総毛立ち、誰かの縄張りに侵入したことが解った。次の行動が生死をわけると見なされたら最後、喉笛を噛み千切られるか、群れから冷遇される。給湯室とはそういう場所だ。

臍物

ゴボァ！ゲボォ！バスタブ一杯に吐き出された臍物に恐れをなし、リビングで震える家族の前に父親が現れた。ついには吐くものが尽きてとうとう皮膚まで裏返ってしまった男の中身は、長らく家族が信じてきた面の皮であり彼らが望む父そのものだった。だから彼らは家族団欒を続けた

。

あなたの見ている世界

「あなたのツイノベ、とても素晴らしいわ。一体どういう本を読んでどういう人生を歩んできたら、こんな素敵な文章を思いつくのかしら。きっと、あなたの見ている世界はとても輝いているのね」「はあどうも」「あなたと同じ人をフォローしたわ。これがあなたの見ている世界なのね！」

装丁屋

最良の作家の新作を発売日に電子書籍で買い、じっくりと思い巡らせつつ読む。どんな装丁が合うだろうって。そしたら本屋に陳列されている装丁を見に行く。本当はオーダーメイドがいいけど予算との兼ね合いで素材選び。印刷が終わるまでカフェで待ち、世界で一つだけの本で再読する。